

アルコールと唾液の混ざった臭いは、嗅いだことないけど死臭っぽい。まぶたを持ち上げるのがめんどくさい。周りでみんな死んでる。私も死んでる。酔い潰れることを死ぬって喻えたら怒られるんだろうか。風呂場から嘔吐のメロディ。胃液すら残ってないんだろう、ずいぶん弱々しくて、すすり泣いてるように聞こえる。

つら。

がんがんの頭痛は、飲酒を中断してしばらく経ってから襲ってくるタイプのヤツだ。眠気の度合いだけで、スマホを見なくても三時ぐらいだとわかる。今夜の痛みは一段と厳しい。痛い痛い痛いしんどいしんどい本当に無理キモい死ね死にたい死にたい死にたい神様ごめんなさいもう二度と酒なんか飲みませんって、学生なら誰でも思いつく誓いを大学入学から今日までの四年間、三桁回破ってきた罰なのかもしれない。

絶え間なく飲み続けて散々に喉を焼き、遂に臓器が酒を受け付けなくなってひたすら夜明けを待つ時間になると、毎回消えなくなるレベルの恥ずかしさではち切れそうになる。大したことないメンヘラは死にたいじゃなく消えたいって考えがち。なんか抽象的で、真剣味がないのが逆に手軽。どうせなら始発が動きだしてから目覚めたかったけど、そんなに上手くいったためしがない。

生まれたてみたいな不器用さで手足を蠢かす。鼻炎がひどいときに寝返りを打ちまくっているとな鼻水が奥に引っ込んで呼吸が通るタイミングに出会える。頭痛も似たような感じ。頭を腕に乗ったりカーペットに擦りついたりして座標を調節していると、ちょっとだけ痛みがおさまってくれる。日によって最適解が変わるのが厄介だ。今夜は肘を立てなければいけないっぽい。攣りそう。

ようやく目が開く。天井の小洒落たシーリングライトから降ってくる光は優しい暖色だけど、それでも鋭利。視線を背けた先のローテーブルには闇鍋の残り汁みたいな濁った液体が置かれてる。スピリタスをグレイプフルーツジュースで割って、ついでに余った水とか酒とかを手当たり次第に注ぎ込んだ呪物。アルコール度数五十パーちょいぐらい。それが、普段は麦茶とかを飲むときに使うであろう、元気なサイズのグラスに半分ぐらい残ってる。蒸発したのかとアホ推理が一瞬よぎったけど、そういえばさっき木之本に無理矢理飲まされたんだった。

木之本は高校まで柔道一筋だったらしく、腕が周りの男子より明らかに太い。その右手で後ろ頭を掴まれ、左手でグラスを押しつけられるのが今年に入ってから飲み会での慣習みたいになってる。日に日に不味くなってるからどうにかしてほしいんだけど、彼はむしろマズさを追求しているようだ。「俺は四月までに、世界が終わる組み合わせを見つけるとかほざいてた憶えがある。そのくせ、いつまで経っても一口で拒絶してしまうほどの味にはならなくて、介護されれば飲めるレベルの仕上がりになるから不思議だ。つくるのより、飲ませるのが性癖なのかもしれない。私としても、胃が裏返るほどキツイ酒を自力で飲むのはしんどいからそれぐらいで留まってくれて助かった。

それで毎回飲み続けてたのに、世界は終わらなかったし私も終わらなかった。三ヶ月じゃ足りなかったみたいだ。日付が切り替わって、三月最後の日曜日も終わってしまった。明後日から私たちは、社会人を名乗って生きてかなきゃならない。

トイレのド派手な水音が脳髓まで届く。ドアを閉めてなかったみたいだ。反射的に頭を傾けると、せつかく決めた座標がずれて痛みが復活した。廊下の奥から木之本が歩いてくる。回想に出てきたばかりなのにまたコイツかよ、とか勝手なことを考えているあいだに彼はやたら勇ましい歩幅で迫ってきた。そのまま脳天の先で立ち止まる。私は何故かテーブルに手を引っかけてふらふらと立ち上がった。見上げると木之本はパスミ全開で口角を吊り上げていた。文芸部で一番彫りの深い容貌。眉毛の長さがちょっとだらしない。彼は初めて気付いたみたいな動作で私を見下ろした。目が据わってる。「殴っていい?」「は?」唐突な質問に戸惑いを返した途端、てのひらが左頬に飛んできた。ドラマとかで耳にする気持ちのいい乾いた音じゃなく、握り拳を喰らったようなベタついた音が鳴った。

綺麗に吹き飛んでカウチソファに倒れ込む。やわらかい。今まで床に横たわってたことにようやく気がついた。顔半分は鈍痛が染みる。皮膚より内側の筋肉が痛い。木之本には色々されてるけど殴られたのは初めてだ。柔道部では加減した殴り方を教わらなかったみたいだけど、ちゃんとクッションの方へ飛ばしたのは偉い。せめて頭痛が和らげばいい、と思った直後に頭蓋が割れるほどの痛みの波が押し寄せてきた。殴られ甲斐がない。

木之本は私から少し距離を置いて床に尻を落としたようだ。伝わってきた震動で吐き気が込み上げてくるのをぎりぎり耐える。けっけっけっと、彼特有の喉を鳴らす笑い声が控えめに響いた。つられて私もへっへっへっと、冷笑系のショート動画を観ているときみたいな忍び笑いを漏らす。何が楽しくて笑ってるのかわからないけど、何が悲しくて泣いてるのかわからないよりはマシだ。

私たちの笑い声に呼応したように、テーブルの向こう側で祈禱（いのり）が「死にたくない」と今夜だけで三十回目ぐらいの弱々しい悲鳴をあげた。見遣ると彼女は倒れそうで倒れない、絶妙な角度で梅酒の缶を握ったまま頰れていた。またちょっと太ったらしいけど、骨格ウェーブのおかげが目立っていないから羨ましい。返事みたいに風呂場で嘔吐いたのは、消去法で考えれば芝だ。軽いマッシュヘアにもち肌。化粧水と乳液には恋人の祈禱よりこだわってるとかなんとか。周りの誰よりも気取ってるくせに、酔うと駄々を捏ねながら丸まるから面白い。風呂場で苦しんでる姿にも興味はあるけど、立ち上がる気力は一生湧きそうになかった。家主の芽依留（めいる）はたぶんまだ、ホテルみたく立派なベッドで眠ってるはず。私の解釈だと、彼女はいびきなんかかかない。古川は、いつも通り静かにしてて存在感がない。

この六人は大学の文芸部に所属してる同回生で、古川を除いた五人が頻繁に飲み会を開くメンバーだった。文芸部は小説を書くサークルだ。もう少し正確にいうと、自意識を垂れ流した文章の羅列を小説だと言い張るバカと、自意識を文章にすることすらできず酒ばかり飲んでるバカの集まりだ。私は後者だった。そもそも小説なんか好きじゃない。文字列を眺めてるとすぐに眠たくなる。あまつさえ自分で書く連中の気が知れない。入部直後に先輩に唆されて一度だけ挑戦してみたけど、スマホに並んでいく自我丸出しの文章がいちいちキショくて癢に障り、断念した。

伝統のせいか、総勢五十人程度のサークルのくせに肩書きだけはたくさんあって、三回生は部長、副部長、渉外、編集、会計、裏会計の六つの役職をそれぞれ一人ずつ担当しないといけないかった。私は裏会計だった。部費とは別の収入……無駄に母校愛が強いOB OGの寄付とかを積み立てたり、それを不測の出費が出た際に切り崩したりするのが主な仕事だった。実際に帳簿を動かしたのは、カラオケ代を集金しすぎたときの一度だけだ。それでも役職は役職だから、サークルに奉仕してるツラが許された。一人だけ、よくできた仮面を被ってるみたいだった。

大抵のホモサビと同じく無能な怠け者である私は、何の責任も負わずに大学生活を満喫したかったし、積極的に動きたくはないのに友達がほしかった。そんな他責思考にとって最もコスパの良い選択が文芸部だったのだ。私が文芸部に入ったのは、四年間を孤独に生きていくことへの行き過ぎた恐怖心と、自分の居場所はインドア系サークルにのみ存在するという確固たる信念が合わさった結果でしかない。ずいぶんと後ろ向きな動機だったけど、四年経った今となってはほぼほぼ成功だったように思える。まあずっと楽しかったし、ストレ

ートで卒業できたし。

最初に期待していたとおり、文芸部では私と似た毛色の連中が群れを成してた。そんな吹き溜まりで一層根暗を極めていたのが古川だ。彼は学祭や合宿なんかのイベントには参加せず、合評会……月に一度部内で開催される、制限時間内に挙手して仲が良い部員の作品を褒めそやしたり、仲が悪い部員の作品にケチをつけたりする会……に顔を出すだけだった。彼は毎回、ほぼ欠かさず作品を提出していたのだけど、普段のおこないのせいか顔に似合わず妙に中性的でポエミーな文章を書くせいか、褒められるでも貶されるでもなく、常にイジられていた。古川の作品に対して発言する部員の意図は二つのうち、どちらかだった。予定された時間を埋めるか、参加者のウケを狙ってふざけるか。本人なんて二の次だった。文芸部の、本来の活動に一番積極的だった彼だけど、扱いとしては幽霊部員みたいなものだったのかもしれない。

古川は部員たちの態度に文句一つ言わず、持ち込んだノートパソコンと仏頂面で向き合い、絶対に顔を上げなかった。表情筋が乏しく幼い顔立ちをしているのもあって、いつも何を考えているのかよくわからなかった。なんか微妙なウィルスのせいで合評会の場合が部室棟の多目的室からオンラインに移されていた時期は、尚更。そのときも彼はオフラインと変わらず参加してキーボードを叩いていたから、少なくともモチベーションはあったのだろう。

私は、それほど悪い小説じゃないなあ、というか他の人と大して変わらないんじゃないかなあ、と思ってたけど黙ってた。古川の味方をしたって一ミリの得にもならないし、それどころか変な噂が立つ可能性すらあった。実際、一回生の頃からお互いを褒め合っていた祈璃と芝は程なくして付き合い始め、今日に至ってるのだ。

部内での私のアイデンティティはもっぱら飲酒だった。芽依留もそうだ。私たちが入学した頃は微妙ウィルスの蔓延で居酒屋が封印されていた。それで同回の飲み会を芽依留の家で開くようになり、恒例になったのだ。彼女の下宿先は大学の最寄り駅から徒歩三分の場所に建つ新築マンションの七階で、3LDKもある。夜の喧騒が失われていた時期は当たり前にしんとしてたけど、今も大通りから一本外れただけとは思えないほど静かだ。彼女が言うには、借りたのではなく両親が買ったらしい。「吐くのはいいけど、壁とかに傷を付けるのはやめて」と事あるごとに言っている。なんでも、芽依留の卒業後に売るところまで計画しているそうだ。

そのうえ彼女は私が三人生活しても全然困らないぐらいの仕送りを受けてる。学校指定

のくせに最寄りから三駅も離れている安アパートに住み、入学早々接客のバイトが見つからなくて干からびかけていた私にはとても想像できない次元だった。

部屋に上がらせてもらうと毎回どこもぴかぴかに磨き上げられてて清々しいけど、細かく観察すると散らかってもある。艶がかったフローリングに、アルファベットを目立たせたハイブラのアイコンバッグが、文房具みたいな扱いで転がっていることもしばしばある。中身がはみ出てることも珍しくない。それが薬の包装シートだと気付いたときには慌てて目を背けた。他人の家で視力を上げるのは、だいぶ趣味が悪い。まして彼女は気軽に場所を提供してくれる神様なのだ。宅飲みに必要な食器類も豊富に揃っている、絶好の場所。恩が深すぎて生涯かけても返せないに違いない。サシだったらすぐ遠慮していただろうけど、木之本たちと申し訳なさを分割してたおかげで今日まで甘え続けてしまった。

私たちが「ありがとう」と言うたび、芽依留は「別にいいよ」と応じる。気にしなくて良い、というよりはマジでどうでもいい、って感じのトーンで。

限りなく豊かな芽依留は、にもかかわらず四年間ずっと夜職のバイトをしている。自分から率先してひけらかしはしなかったけど、やけに稼いでいる匂いはどうしても漂っていた。だから一度、酔った勢いで何故そこまで稼がなければいいのか訊いたことがある。社会人の宴会では金銭事情に関する質問なんか絶対タブーなんだろうから、学生の特権だ。

たぶん目を輝かせてしまった私に向かって芽依留はあからさまに迷惑そうな溜め息をついていた。「きみは意外にノンデリだね」彼女は二人称に『きみ』を使う。卒業していった先輩の中には彼女を陰で『きみちゃん』と揶揄する人もいたけど、私は逆に、サマになりすぎてズルいとすら思ってしまう。背が高いからだろうか。彼女は宙空を見上げ、指で山を描きながら続けた。「こういう、シャンパンタワーってあるでしょ」「概念しか知らない。本当にやるの？ 危なくない？ すぐ倒れそう」「ほとんどの場合は客がその場で払うんだけど、男の子が一旦持つときもあるわけ。売り掛けてヤツね」「え、バ先じゃなくてホストクラブの話、してる？」「で、客が飛ぶでしょ。太客に育つてると思って油断したら連絡取れなくなる、みたいな。担当のここは高級店じゃないけど、それでも一回で五十万とか」「……へえ」「返してあげないと可哀想だよ」「いや、店が負担するべきなんじゃないの」常識に頼って首を振ると芽依留は悲しんでるんだかバカにしているんだかよくわからない笑みを浮かべていた。「そう言われると思ったから説明したくなかったんだよな」「ごめん。そもそもそれ、スパチャみたいなものかな」「スパチャはシャンコの方が近くな

い？ 他の客が入れたらキャスト全員そっちに行くからオンリーにされる。腹立つからこっちも入れる。赤スパの投げ合いと一緒感あるよね」「えっと」「あ、オンリーってのは席にぼっちで取り残されることね」オタクノリの喻えで接近を試みたけど芽依留の世界は縁が遠すぎて理解できなかったから申し訳なかった。そのうえ、夜職の中でもキツイ稼ぎ方してるんだろいうなあと無駄な想像力を働かせたせいで余計に申し訳なくなった。それでもなんとかわかりあおうと、自分でも共感できそうなポイントを探ってみた。「芽依留が好きな人って、やっぱり顔面強い」「うーん。太陽の下で見たら並以下だと思う」「性格がめっちゃ良いとか？」「性格良い人はホストやらないんじゃないかな。まあみんな、性格良いアピ頑張ってるけど」「……じゃあなんで借金の肩代わりなんかするの」「私の魂が通用するの、ホスクラだけだから」結局、最後まで彼女の語る世界観に近づけなかった。「……ま、何にせよ私なら水ぐらいしか頼めないってことか」「水？ フィリコって下手な酒より高くない？ 三万とかするし」適当に話を切り上げたつもりが見逃してもらえず、変な声が出た。芽依留のテンションがわからなかった。私がホストを知らない前提で話してるなら専門用語が多すぎるし、知ってる前提で話してるならどこか説教じみてるような気がした。

そもそも彼女とはちょっと感性が合わないのだ。今では当たり前になってるけど恋人でもない男が風呂場で嘔吐してるのを平気な顔で許すなんて、私には無理だ。恋人でもないやだし女友達でもないやだ。「ハウスキーパーに頼んでるから大丈夫」とか言うけど、そういう問題じゃないと思う。私なら初めて会った清掃業者に自分の部屋の不始末を見られたくない。身長と顔面偏差値が違っていると吸い込む空気も変わるんだろうか。

文芸部での言動もそうだった。最初の自己紹介で聞いたこともない古い文豪や外国の作家を挙げて熱弁を振るい、「今はただのワナビですが、在学中に新人賞を獲るのが目標です」とまで豪語していた。ワナビとは何者かになりたい人の総称で、特に作家志望者が頻繁に使う言葉らしい。

けれど彼女は一回生のときに一度作品を提出して、それきりだ。三回生では副部長に務めていたしイベントには積極的に参加するから熱意がなかったわけじゃないと思う。なのに合評会の日だけは「忙しい」の一点張りで絶対に顔を見せない。作品の評価だって悪くなかったと記憶している……正直、私には古川とか他の部員とあまり変わらないように見えたけど。

新作を期待して焚き付ける部員もそれなりにいたし、彼女もそのたび「締め切りに間に合えば出すよ」と言ってたけど、今となっては全部嘘で終わってしまった。まあ文芸部員には

ありがちな嘘だから誰も真面目に受け止めてなかっただろうし、落胆もしてなかっただろう。

それよりも、みんなが心底迷惑がってたのは副部长としての仕事ぶりだった。無断での遅刻や欠席は多いし、他校との交流会や二次会のセティングなんかは高確率ですっぱから任せられない。事後処理をするのはいつも、暇をしてる私だった。副部长は裏会計に次ぐくらいに閑職だから、兼任したところで少しも忙しくならなかったのが幸いだ。

彼女の杜撰さを真面目に怒る部員もいたけど、話し合っても噛み合わないし直らないので最終的には怒る方が間違ってるみたいな雰囲気になった。私も仕事を代わって感謝された憶えはない。でも飲み場を与えてくれるから、大抵のことは許せてしまった。

振り返ってみると、一番の問題は仕事の能力というより、彼女自身に先輩後輩と仲良くなる意思がなかったことなのかもしれない。部室には頻繁に顔を出してたけどコミュニケーションを取るのは私たち宅飲みのメンバーだけで、疎遠な部員からの冷ややかな視線を気にする素振りも見せなかった。よくいえば自由奔放だし、悪くいえば自分本位だ。

……もしかしたら、私たちからも一歩、距離を置いているのかもしれない。芽依留の家で盛り上がっているときにふと見ると、彼女は決まって部屋全体を見渡して黙ったまま薄く笑っている。輪に入っているというよりは上から観察しているようだ。会話すると大抵聞いたことのない固有名詞が一つは挟まる。芽依留に空気を読む能力がなかったのか、陰キヤ集団である文芸部員が間違ってたのか、よくわからない。社会に出たらわかるのかもしれない。

「死にたくないあい」と祈璃が呻く。追いかけるように芝が嘔吐いた。仲が良いのかトラウマなのか。ここまで定期的だと時報みたいだ。

祈璃は同回で唯一の浪人生だ。二浪してるから歳が二つ離れている。昔は二〇〇〇年……二十世紀生まれなのを自虐ネタにしていた。「これだから新世紀生まれは」が口癖だった。けど、歳を取るにつれて自分の中で洒落にならなくなってきたのか、最近は芯のない「死にたい」ばかりが目立ってきている。私も割とポップに死を口ずさむけど祈璃はもっとひどい。基本的には物事を死ぬか死なないかで評価するし、作品では大抵主人公がしょうもない悩みに囚われて自殺する。

死にたさは内定が決まってからエスカレートしていた。今年に入ってから、祈璃の言う死は大学生の資格の喪失と社会人への変化を意味するようになった。その場合、現時点の彼女は生きてても死んでもいない、絶妙な状態だ。私に聞こえているのは真摯な悲鳴ではなく、ゾ

ンビの無意味な叫び声なのかもしれない。

祈璃の悲しみには、個人的にどうしても共感できない。彼女が内定を獲ったのは東京に本社を置く大手IT企業の子会社で、私が役員面接まで進んで落とされたところなのだ。そのため彼女が「内定者懇親会にウェイ系しかいなくてつらい」とか「資格の勉強で休み消えそうでしんどい」とか嘆いてるのを聞くと、マウントを感じて勝手につらくなってしまう。

まだ酒が入ってなくて思考が活発なときに「死にたくないあい」を聞くと、私はどうしても面接でガン詰めしてきた白髪まみれのジジイを思い出す。ヤツは緊張した私の拙い喋りに最初からイラついていた。それまでZoom面接だったのが急に本社に呼び出されて、こちらにも化けの皮が剥がれていたのだろう。ものの数分で「やっぱり今年はダメだ、賢い引きこもりみたいなばかり上がってくる」と嘲笑まじりに吐き捨てたのが全てだった。私の方は早々に諦めてたのに、予定された三十分が過ぎるまで帰してくれなかった。インスタントなパワハラって感じがしてわくわくしたけど、あとから考えてみると当然受けるべき説教だったのかもしれない。「今日、ここに何しに来たの」「えっと、私が御社を志望した動機は……」「そうじゃなくて、どういうつもりでここに来たのか訊いてるの。こっちはあなたに時間とお金を使ってるんだよ」確かにその企業は珍しく交通費を全額支給してくれた。新幹線を想定した金額だったけど、私は夜行バスで往復して余った分を宅飲みの酒代に費やした。

そんな私が落ちて祈璃が通ったのは勧善懲悪みたいな話か、と思ってたけど話を聞く限りそうじゃなかったみたいだ。彼女は交通費が出るのを黙って、親に全額立て替えてもらったそうだ。内々定直後で浮かれています、情緒も安定していた祈璃は「私の実家、東京でしょ。帰省ついでに内定出て良かったあ」と満面の笑みで言っていた。

彼女とは同じ文学部だし、なんならゼミも一緒だ。だから私は単純にコミュ力とかガクチ力とか礼儀作法とか、そういう就活に必要な実力で負けたことになる。別に文句はない。私と祈璃の脳味噌がタイムマンで勝負すれば完敗に終わるのが目に見えている。基礎能力が高くて意外に真面目な彼女は単位を落としかけている私に何度もノートを貸してくれた。ゼミで協力してプレゼンをつくる時も、私はいつも助けられる側だった。就活では普段のこないがそのまま結果として表れたただけだ。

競争から脱落して間もなく、私も地元で医療事務の内定を決めた……親戚のコネ、ということだった裏技を使って。もともと向こうから誘ってくれたのを一旦は断ったくせに、切羽詰まってから頼み込むなんていう、実に情けない顛末を辿ってしまった。

祈璃が先にゴールしたのを見て焦ったのは間違いないけど、後悔はしていない。もし世話をしてくれる親戚が存在せず、NNT（無い内定）を続ける世界線で生きてたら、私は彼女の連絡先を全てブロックするほど嫌いになって、宅飲みにも参加しなくなっていただろう。今でさえ、ちょっとだけでもどかしいのに。

木之本は最初から父親が役員を務める企業に入ると決めていて、就活には参加すらしていなかった。それに比べれば私の経緯だって、そんなに卑下する話じゃないのだろう。ニートにも就職浪人にもならず働き始めるという結果はみんな同じなのだ。それでも祈璃に勝てなかった事実をいつまでも引きずってしまう。まして勝者は目の前で泥酔し、口端から漏らした唾液を床に滴らせる有様を晒している。素直に受け入れられるわけがない。

教授の好意に頼り切った、あってもなくてもいい卒論を提出して年を越し、就活とは比較にならないほどイーजीモードな口頭試問を切り抜けて単位を満たし、文芸部の送別会を、酒が飲めない後輩たちに囲まれて素面でやり過ごしていくうち、祈璃のメンタルはどんどん転げ落ちていった。最初は私も「ベシミズムでバグってるだけでしょ」と茶化していた。考えすぎだと伝えたかったのだけど、下がり目が特徴的な整った顔を極限まで歪めて怯える彼女に冗談を口にするのは憚られるようになった。飲み会のたび、さすがにこれ以上のヒスは起こさないだろうと思うのだけど、次ではきっちりハードルを越えてくるのでびくりするし、酔った頭ではついつい笑ってしまう。

前回の飲み会は先週、卒業式のあとに開かれた。そのときも祈璃は延々と彼氏にしなだれかかって「死にたくないあい」と叫んでいた。大学生協と一緒にセットしてもらった髪型の名残がぐしゃぐしゃになっていたせいか、いつもよりみつともなく見えた。

祈璃の芝に対する依存度は希死念慮と共に、指数関数的に上昇している。容赦なく泣き喚いたあと、幼児みたいに電池が切れて眠り込んだ祈璃を、芝はどこか安心したようにさすっていた。深々と溜め息をつく彼に、私は精一杯遠回しに本音をぶつけてみた。「疲れない？」「疲れるよ」「付き合って三年過ぎたよね、文芸部で一番長いんじゃない？　芝は優しいね」「俺は、祈璃にフラれたら次なんて絶対ないから」素直に捉えたらそれだけ愛しているという意味なんだろうけど、素直じゃない私には芝が、祈璃に失礼なほど自虐しているようにしか聞こえなかった。

芝は祈璃に合わせて、地元でもない東京の企業ばかりを狙っていた。そういうところが私は苦手なのだけど、結果的に首尾良く内定を獲得したのだから彼女の存在は最高の原動力になっていたのかもしれない。

「芝、家畜化してるよね」芽依留が目を細めながら横槍を入れてきていた。「かちくか？」
「芝だって、二人っきりのときは祈璃にめちゃうちゃ可愛がられてるんでしょ。だからやっていけるんだよ」私の疑問はどこかへ行ってしまったけど、それを聞いた芝が明らかに狼狽えて「いやー、まっ」とか呻きだしたから、なんだか図星だったようだ。

「すごいね」みんなが力尽きてしまった午前四時、ぎりぎり生き残っていた私は芽依留の観察力を素直に褒めた。すると彼女は口の端で煙草を啜えたまま「リスカ見りや想像つくよ」と応えた。「ファッションリスカだからちょっとわかりづらいかもだけど」「え、祈璃が？」
「いや、芝の方。就職してからバレなきゃいいね」テーブルに突っ伏して静かに眠っている芝の、パーカーの袖をめくってみると、確かに芽依留の言うとおり控えめな横線が何本か走っていた。

思わず、妙に重々しい声で「メンヘラカップルかあ」と呟いてしまった。メンヘラカップル。そういえば入学した頃に私が抱いていた恋愛の青写真はだいたいメンヘラ的な依存と執着にまみれたものだったし、今でも大して変わっていない。皮肉なことに、祈璃と芝は理想像なのだ。なんならもっと過激でもいい。学生のうちに最高に好きな彼氏をぐちゃぐちゃにぶん殴るか、ぶん殴られる人生でありたかった。

長ったらしい春休みのあいだ、私は社会人として巣立つための準備なんて何もしていなかった。せいぜい下宿先を引き払ったぐらいだ。行動を伴わないまま時間は容赦なく過ぎて、遂に昨夜、学生生活で最後の飲み会が始まってしまったのだった。

楽しみにしてたのと同じぐらい、祈璃が荒れるのを覚悟していた。けれど芽依留が古川を呼びたいと言い出したのはさすがに予想外だった。これっきりの宅飲みで微妙な空気が漂うのは避けたかったけど、他ならぬ家主の提案だったから誰も声高に反対しなかった。

六時過ぎに訪ねると古川はもうリビングに座っていて、私は芽依留の家に彼がいることに驚愕してしまった。古川は送別会にも顔を見せなかったのだ。そもそも大学生活を通して、彼が飲み会に参加したこと自体、一度もなかったはずだ。

やがてやって来た木之本は古川を目にするなり大声で笑った。続いて祈璃と芝が連れ立って現れたが、二人は古川に軽く挨拶しただけだった。気のせいか、彼女の目は早くも赤くなっているようだった。

一人増えるだけで凄まじい違和感が場を支配した。男三人と女三人で合コンみたいだね、と言おうとしてどう見ても私と古川だけレベルが低すぎたので、やめた。

くだくだしい乾杯とかを呼びかける前に芽依留が缶ビールを開けて口をつけたので、飲

み会はなし崩し的に始まった。いつも通りだけど楽しい、もしくは楽しいけどいつも通り。結局この四年間、私の人生や情緒のほとんどは芽依留の家で完結していたような気がする。入学したときのウイルス禍の影響が強いのもかもしれない。新歓などなく、そもそも居酒屋で騒ぐ機会すら奪われていた。たまたま酒が強い面子が揃ったこの回は、七階の3LDKを中心にして内なる結束ばかりを固めてきたのだ。

微妙なウイルスは微妙すぎて私たちに近寄りすらしなかった。いや、もしかしたら遭遇していたのかもしれない。この前の新年会で芽依留が「確か入学してすぐくらい、ずっと喉が痛い時期があったんだよね」と何気なく暴露したのだ。一瞬だけ場が凍ったあとに私は訊ねた。「……咳してたっけ?」「めっちゃごまかしてたかな」「普通に飲み会、してたよね」「してたな」私たちは後にも先にもないぐらいのテンションでゲラゲラ笑った。確かにその頃、体調悪かったかも、とみんなが順々に告白して、もっと笑った。それだけだった。こんな雑さも身内だけで通じる不謹慎も、社会じゃきつと許されない。

古川は芽依留の鏡みたいだった。彼女が缶を手にとると彼もそうするし、喉を鳴らすと追いつくように飲み始める。古川にとって一番の頼りが芽依留だったのは間違いない。なのに、乾杯して三十分ぐらい経ったあたりで彼女は「夜勤が続いてて疲れてる」と言い残し、寝室に引き上げてしまった。私たちにとってはいつも通りの振る舞いだったから特に気にも留めなかったけど、古川にしてみれば置き去りにされたような心持ちだっただろう。

最初のうちは彼を馴染ませようとみんなで色々質問をぶつけてみたけれど、吐息よりも薄い回答しか返ってこなかった。やがて祈禱が話題の中心へ強引に立ち、自分の悲観を昂ぶらせるかのように四月以降の不安を持ち出した。ここ最近は彼女が泣き出すまでのあいだ、なんとか話のベクトルを変えようと全員で無駄な努力をするのが恒例になっている。その流れで木之本が古川へ就職したのか訊ねてみた。彼は小動物みたいに小刻みに首を振りながら「単位足りてない」と呟き、おかげで室内は底の底まで冷え切ってしまった。

みんなが気を遣って話しかけなくなると、それはそれで不満だったのか、古川は胡乱に視線を彷徨わせ、特に私をよく見つめていた。臆病が過ぎるあまり「帰る」と自ら言い出せない気持ちはよくわかってしまう。まるで高三までの自分を見ているみたいだ、と偉そうな考察をしてしまったぐらいだ。

飲酒が進んでいつもの、やや下卑たテンションを発揮し始めた私たちをよそに、古川は三角座りに近い姿勢で缶酎ハイを少しずつ飲んでた。こういうインドア系のサークルの集まりで眼鏡をかけているのが彼だけというのは、割と珍しいかもしれない。そう気付いて改

めて観察してみると、彼の缶を持つ手は波立つほどに震えていた。少しでも自責の念を感じて、私はできるだけ彼を視界に入れないよう座る位置をずらした。

誰も古川を気になくなっていった。私は二月末までバイトしていたレストランの閉店が決まったことを報告してギリギリ逃げ切れたことを喜んだ。木之本は教習所の免許合宿で出会った彼氏持ちの年下と二週間セフレになったことを初めて打ち明けた。なかなか強いネタが揃っていたはずだけど、どうしても主役は祈璃で、十一時を過ぎたあたりにはすっかり彼女の独壇場になってしまっていた。

みんな舌を回すのに疲れていたから祈璃を止められない。こここの彼女の彼女は可愛さを装うだけの気品すらかなぐり捨てて、汚い言葉を使うのにも躊躇しなくなっていた。

「学部の先輩が言うんだよ、別に社会に出たって大したことないよ、とかさあ、祈璃の就職先は有名なホワイト企業らしいよ、とかさあ。そういう問題じゃないじゃん。いくら社会人になったって何も変わらないとか言われても、もう社会人になっちゃったヤツの言うことなんか信用できるかよ。その先輩だって学生時代は死にたがってたくせにさあ。勝手に死にたがるのやめてんじゃねえよ！ 大学二回ぐらいまでは部屋からも出るなどと言われてたのに、なんで社会には出なきゃなんないんだよ。意味わかんない、二十世紀生まれのクソ老害どもがよお！」

支離滅裂だし、二十世紀のくだりは完全にブーメランだよなあとかぼんやり考えている前で祈璃は芝に抱きついて、泣いた。ギャン泣きだった。その頭を撫でる芝も鼻をすすっている。木之本はケツケツケツと笑いながらも明らかに眉をひそめて二人を睨みつけてた。祈璃のエゴすぎる理屈にキレたのかもしれない。

まあまあ……と取り成した声が自分か他人かはっきりしない。この繰り返しで今日で終わることだけを見ると、どうしてもほっとしてしまう。社会が地獄かはまだわからないけど、全力で彼女をなだめすかす生活が続くのは確実に地獄だ。

きっとみんな気付いているのだ。どうせ祈璃は上手く世間を渡る。彼女が社会人になってなお苦労している姿はあんまり想像できない。デカイ声で泣き喚くのは今日で終わりにして、入社式には将来への希望にうち満ちた笑顔で参加して、働いて、相手が芝かどうかはともかく結婚とかのライフイベントも難なく乗りこなして、死にたがるのをやめて普通の人間として適応する未来が容易く見える。私が落とされた会社に受かった事実を鑑みれば、その思いはいや増していく。

なのに、祈璃はおざなりの憂鬱をばら撒き続けているのだった。まるで彼女の成長を手伝

わされているみたいに、私たちは全員保護者の役割を押しつけられて、そして一様に疲れ切っていた。

負の感情はゆっくりと私たちをも蝕み始めている。誰もが社会人生活の到来を過剰に怖れだしているようだった。その証拠に今日は酒の消費がやけに速い。あらかじめテーブルに並べられてた大量の酒瓶と炭酸水のペットボトルは大半が空になっていた。アイスペールの氷が私たちの理性と一緒に溶けて崩れかかっている。

一オクターブ高い嗚咽が弾けたところで誰かが舌打ちした。緩い集団ヒステリーが芽吹いているようだった。私は唐突な寒気を覚えて祈璃から目を逸らした。

窓の方を見ると、ガラス越しに古川が背を向けて突っ立っていた。

いつの間にベランダへ出たのか、何をするつもりなのか、考えるより先に彼はゆっくり遠ざかっていく。機械みたいに一定のスピードで手すりを握り、足を引っかけた。シャツの裾からインナーが飛び出てはためいていた。縮んだ靴下を履いているせいがかかどが丸出した。いつかの朝も同じだったのを思い出したが、すぐ緊迫感で掻き消される。

「死にたくない！」

祈璃が激しく慟哭したのと同時に古川は勢いよく柵を跳び越え、スンと暗闇の向こうに姿を消した。

小さな空白のあとに鼓膜を叩いたのは木之本が乱暴にグラスを置いた音だった。私は視線を戻して三人を曖昧に見遣った。室内では日常が滞りなく流れていて、祈璃が空虚な死を怖れ続けている。私以外、誰も古川が消えたことに気付いていなかった。

私は叫ばなかった。叫べなかった。木之本が眼前に用意していた、世界が終わる酒を飲みください。この一瞬だけは無味無臭だった。古川は失敗せず、死を成し遂げたのだろうなという思いが脈絡なく湧き上がった。頭の中で彼の残像が躍るのを必死に振り払う。最初から古川なんて参加してなかったんだと思えば、本当にそうだったように信じ込めた。

泣き疲れたらしい祈璃がテーブルに突っ伏した。芝が介護を中断し、青い顔で風呂場に駆け込んでいった。続けざまにごぼごぼと水っぽい咳が響く。直接聞いているはずなのに、音割れしてるみたいだった。木之本はへらへらしながら世界が終わる酒をかき混ぜ続けている。私のペースが速まっているのに気付くと彼は目を見張りながら満足そうに頷いて、新しいグラスを持ってきて予備の終わりをづくり始めた。

私は終わりを飲みくだし続けた。良心とか理性が完全に焼き切れた果てで意識が飛ぶまで、誰も古川の不在に言及してくれなかった。

そして目覚めてしまった。何かが変わったような気配はない。木之本に殴り飛ばされてやたら強い痛みを感じたのは、現状が一つも解決していないと再認識させられたからかもしれない。事実に向き合わなければならない義務感と、本能的な逃避の欲求がせめぎ合う。夢だと思い込みたい現実の中で、私は昨年末のZoomでの合評会を思い出していた。そのときも古川はいつも通り中性的でポエミーな作品を提出していた。司会を担当する一回下の部長が作者名を読み上げた時点で、ディスプレイに映る顔面たちが一斉に半笑いを笑った。彼は最早後輩からもイジっていい人間として扱われていたから、挙手制で意見を述べる会は合評というより吊し上げみたいだった。「女の子に憧れを持ちすぎてるんじゃない?」嘲笑。「ボカロの歌詞みたいですね」哄笑。「……誰も意見がないようでしたら早めに終わらしましょう、か?」爆笑。「私は面白かった」沈黙。四回生である私の意見には、要らない威厳が付き纏っていた。秒で後悔した。どうして流れに逆らうようなことを言い出してしまったんだろう。いつも通り生産性のない合評会に、溜まっていた鬱憤が爆発した……わけはないと思う。就活のストレスで自棄っぱちになっていた可能性の方が高い。少なくとも古川に向けられる、作品とは関係ない軽蔑が、白髪まみれのジジイを思い起こさせたのは確かだ。

続けざまに彼に対する不当な評価を糾弾し、作品そのものを、語彙力を尽くして激賞したら格好良かったのかもしれないけど、それができるなら面接で苦勞なんてしていない。威勢が良かったのは最初だけで、私は二の句を継げずに黙り込んでしまった。文芸部員になって四年も経ったのに、未だ感想さえもとに言語化できない。小説に興味がなさすぎるのだろうか。でも、周りだって五十歩百歩だ。

それでも私の反発は、特に古川に対して観面の効果があったようだ。翌日、彼から初めて個人的なメッセージが飛んできた。『昨日はお疲れさまでした。普段はどのような小説を読んでおられるのですか』。今にして思えばかなり胡散臭い文面だ。当たり障りがないようで、こちらに返答を強制している。やり取りを長持ちさせたい意図が透けて見える。女子とライオンを続けるテクニックを、Aにでも訊いたんだろうか。

考え無しにメッセージを投げているうち、サシ飲みに誘われた。文芸部の連中は芽依留たちを除いて生真面目に、微妙ウィルスをきっかけに始まったオンライン体制を引き継いでるからなかなかリアルで会ってくれないし、そもそも酒好きが少ない。そのせいか、飲みに誘ってくれる人間はそれだけで仲良くなれると錯覚するようになってしまっていた。判断

基準が壊れてるのは自覚してるつもりだったけど、他のやり方で友達をつくる方法を忘れてしまっていたから仕方ない。だいいち、古川は同回で、一応四年の付き合いがあったのだ。

彼との会話はいつも大衆居酒屋の激安ハイボールより味がなかった。作品の話は一切出なかったし、訊かれることもなかった。大抵は脳味噌を一割も使っていないようなやりとりで終始した。退屈なぶん、気楽だったともいえる。代金を向こうが持ってくれるのをいいことに年明けからそれなりの頻度で会い続けてるうち、さすがの私も彼の、好意の薄皮で包まれた性欲を察知した。それと同時に私は自分自身の、性愛経験の欠如を自覚したのだった。オタク界隈の住人だから知識は豊富にあるけど、知識しかない。高校まではコミュ障陰キャだからと言いついて聞かせていられた。けど同類が集まっているはずの文芸部で周囲は次々くっついて、反対に私はいつまでもソロだったのだ。他の原因が自分にあるのかもしれないという不安が否応なく鎌首をもたげていた。

そしてその不安は古川の性欲で解決できるかもしれない。私が気にしてたのは行為そのものではなく彼との行為によって得られる何かだけだった。焦りからの解放とか根拠不明の優越感とか安心感とか。そういう相手として古川は適任であるように思えた。たぶん私は彼を、生理レベルでまでは嫌っていなかったのだ。同族意識なのか顔面を比べて覚えた諦観なのか、理由はわからないけれど。

「処女ってめんどくさいの」いつもの宅飲みで木之本にこっそり訊いてみて、直後に鼻で嗤ってしまった。こんな問いが自分の口から飛び出る日が来るなんて思ってもみなかったからだ。「昭和みたいな質問してくんなよ」そう嘯いたとき、彼はソファに座って私の頭頂部を肘掛けに使っていた。「令和でも気になるもんは気になるでしょ」「答えにくいんだよ、めんどくさくなるから」「やっぱりめんどくさいんだ」「いやそういう意味じゃなく」彼は私に遠慮を知らないけど、性欲は決して向けてこない。たぶん他で間に合っているのだ。彼女とかセフレとかで発散できない欲求ばかり私にぶつけているのだろう。つむじを腕ですりながら彼はもどかしげに続ける。「今の時代、男が面倒って言ったら戦争になるわ。まあ、逆に女の方が気にしすぎてる感じもするけど」「知らないんだけど、その世界観」「インスタとか見てたらわかるだろ、俺の知ってる女、ブスって言われたわけでもないのに整形するしデブじゃないのに痩せようとするし、脱毛もしまくるし、そんなんばっかだよ。男が直接言ったら角が立つようなことを、広告が代弁してくれてる感じ」「あーね。歯並びとかファッションとかもね」「だから処女かどうか、何が悪いかわからないって素振りをしておくのが正解。というか常識。黙ってたら上澄みを掬えるから」「すご。プロのカスみたい

じゃん」「なんで今更そんなの気にしてんの」「え」たった一文字と、顔を見合わせた二秒間だけでプライバシーが伝わる場合もあるらしい。木之本は酔いが吹き飛んだような真顔で私を見つめた。「彼氏いなかったのか、そういや……嘘だろ、そんなに飲んでるのに?」「関係なくない?」正論を吐いたつもりだったが彼は目を細めて「毎回ここにいるもんな……」と独りごち、私から肘を離れた。やっぱりめんどくさいのだろう。

とどめは古川の一言だった。それとなく探りを入れてみると彼は、大学一回の頃に彼女がいたことを控えめに告白したのだ。ただの強がりだったのかもしれない。けれど杞憂はますます加速していった。

一月末、私と古川は朝方まで開いている、今どき珍しい居酒屋で対面していた。これまでと変わらない酒量で彼は強かに酔っ払ってしまったらしく、いつもより饒舌だったし帰りがたがらなかった。私は彼の三文芝居をぼんやりと眺めながら、まあ作品もそこそ面白………と思っていた。知性に惹かれたとか言えば聞こえはいいけど絶対にそんな賢しらぶったものじゃなくて、単に妥協する理由がそれしかなかったのだ。私なんかの相手にはこのへんがふさわしい。

それで古川に、学生御用達とされてるラブホテルまでちょっと力強く引っ張られたときも、抵抗しなかった。消臭剤のキツイ臭いが漂うロビーで、彼は五段階ある部屋のランクから真ん中を選んでボタンを押した。どうせなら一番高い部屋が一番安い部屋で割り切ってほしかった。

シャワーだの愛想笑いにまみれた会話だの無言の時間だの、一連の事前手続きが終わるとアリの脚みたいにせかせかせした調子で行為が始まった。古川の指先はコンプラを意識しまくっていて、鈍く薄ぼんやりとしていた。身体のあちこちに痒みに似た感覚が起きて、そのたびマナーとして合いの手みたいなの喘ぎ声を心がけていたのだけれど、案外脳味噌は暇だった。酔いが剥がれ落ちるように醒めていく。なんだか砂場みたいな臭いを嗅いだ気がした。芽依留の家で初めてアルコールを飲んだ日を思い出す。精神年齢に合わない背伸びをするときはいつも土臭さが付き纏い、私は私の幼さに打ちのめされてきた。

忙しなく動く古川の影が邪魔だったので目を閉じ、大学生活を回想する。あのときハイボールに口をつけたのは完全にその場のノリだった。木之本や芽依留に倣って同じものを飲む行為が、芋臭い私を大人に格上げしてくれるように感じられたのだ。当時は公共の場での飲食が禁止されていて、だからこそ周りより成長できた気がした。けれどそんな成長は反抗期の繰り返しみたいなものだった。当時やけに大人びて見えた四回生も、自分がなってみ

ばただの泥人形だ。ひょっとしたら私は四年経った今なお大学デビューの真っ最中で、イキリ続けているのかもしれない。あの日から私は置いて行かれたくない一心でここまで来ただけだ。依然として心根は変わっていない。そもそも本当に酒が好きなのかどうかもうかわかっていない。ちゃんと飲みたくて飲んでるんだろうか。

入部したときに仲が良くなったメンバーが違えば、今頃私は下宿先から一步も出ずにヘッドセットをつけてFPSに明け暮れていたかもしれない。酒無しで。そんな自分が容易に想像できた。部屋に引きこもったままでも全然フラストレーションを感じていない自分が。大人の言いつけを守って密を避け、代わりに昼夜逆転して情緒を頹廃させている自分が。

文学なんて特に勉強しなかった。でも、した。就活なんて絶対にしたくなかった。でも、した。両方とも他人の力を借りてまでやり抜いてしまった。振り落とされたくないからしがみついていたのだけれど、それだけじゃ自意識は育たないみたいだ。当たり前だ。言われたとおりに脊髄で動いていただけなんだから。

セックスだってしたいわけじゃなかった。でも、してる。

まばたきの逆みたいな感じでふと目を開けると、薄闇の中で古川が動きを止めて顔を近づけていた。涙袋と頬の狭間辺りをしげしげと見つめている。キスでもされるのかと思って身構えていたら彼は専門家みたいに興味深げに「こんなところに毛が生えてる」と呟いた。その声音を聞いた途端、私は自分でも驚くぐらい何もかもがイヤになった。けれど今更取り戻せるものがあるわけでもない。古川の、下手したら私より細っこい身体を勢いよく抱き寄せた。そうすればさっさと終わる気がした。

初体験にありがちな失敗も起きず、きちんと服を着直してから眠り、翌朝、駅まで歩いて別れた。道中で古川はちよつと興奮した調子で何かを喋りたてていたけれど、疲弊で五感が曖昧だったせいかよく聞き取れず、微笑んで取り繕った。彼はそれで満足したみたいだった。改札口で私を見送る彼の服装は上から下まで余すところなくだらしなかったが、わざわざ指摘するのも鬱陶しかった。

安アパートに入ってコートを脱ぐところまでは平静だったけれど、次の瞬間に鞆を壁にぶん投げて中身を飛び散らせた。私が古川みたいなヤツにとって都合の良すぎる女を演じていたことぐらい最初からわかっていたつもりだ。それが遂に質感を持って全身を支配していた。続けてスマホを投げようとしたところで、自分の激昂が祈禱のそれと同じぐらい幼いことに気付いて踏みとどまった。レイプされたわけじゃないんだから、今更怒ってみせるのは情けない。私たちは何度も二人きりで会って、最終的にホテルに行ったんだから、客観

的に見れば単に恋人同士として進展しただけにしか見えないだろう。実際、古川の頭の中ではそういう物語がとっくの昔に組み立てられているはずだった。そうでなければアイツみたいな男が女をホテルに連れ込めるはずがない。そんな女になってしまった私がバカだったんだ。

手の中でスマホが震えた瞬間、古川だと直感した。文面も読まずに「もう連絡とらないで」とだけ送って、すぐさまブロックした。考えられる限り最善で、最も無様な対応だ。向こうにしてみれば奇行としか思えなかっただろう。

幸い古川は追及してこなかったし、ストーカーに変貌することもなかった。今日に至るまでの約二ヶ月間、彼は本当に一度も連絡してこなかった。だから私は彼が、彼なりに自分の思いを片付けて別の世界に去って行ったのだと思っていた。

思っていたのに。

拳を叩きつけるが、ソファに吸収されて望んでいた音も震動も返ってこなかった。余計に怒りが募る。ガチで腹が立つ。私は何もなかったかのように振る舞っていたのに。誰にも話さなかったのに。そんなに心残りがあったのか。それなら私を殺す方が筋が通ってるだろう。なんで自殺なんだ。なんでこのうと死ねるんだ。これじゃあ私の方が未練がましいみたいじゃないか。最期の瞬間を私しか見ていないことに、彼は気付いていたんだろうか。私に救急車を呼んでももらえとか、少しでも期待したのか。バカにすんな。なんで私がお前を救ってやらなきゃならないんだ。

背後で勢いよく扉が開いた。久しく聞いている衝撃音に心臓が跳ねる。振り返ると起き抜けの芽依留が灰色の部屋着姿で髪の毛をかき混ぜながら、あくびと深呼吸の中間みたいな息を吐いている。

「木之本、ちょっと芝剥がしてきて、歯、磨きたい」一人だけ元気いっぱい芽依留は彼を無理矢理立ち上がらせて廊下の方へ押し遣った。そして転がっている空き缶を無雑作にゴミ袋へ詰めていく。無闇に散らかった物事がてきばきと片付いていくようで、見ていて気持ちがいい。一通り片付け終わると私の隣に座って煙草に火を付けた。いつもの、中年サラリーマンしか吸ってなさそうな紙巻き煙草だ。すっかり死んでる私と祈禱を満足げに眺めてから、彼女は自然な感じで「あれ、古川は？」と訊いてきた。

「死んだ」正気の芽依留だけが唯一の頼りであるように思えて即座に応える。死んだ、で済ませるなんて冷酷すぎるかもしれない。でも他の表現なんて思いつかない。私はまだ怒っていた。「さっき、ベランダから飛び降りた」

「マジか」捨て鉢に唸るように声色のおかげで真剣味が伝わったみたいだった。彼女は目一杯伸びをしながら宙を仰ぐ。「めっちゃだるいじゃん」

芽依留の性格ならすぐにでも通報するかと思ったのに、彼女は茫然と腰を落ち着けたままだ。息を止めてるみたいに煙を吸い込み、吐き出すのを五回繰り返した。満身創痍の私も、彼女の方が現実味を感じて動揺しているようだった。

私が「私のせいかもしれない」と言ったのと芽依留が「やっぱり私が殺したことになるのかな」と言ったのはほぼ同時で、私の声は彼女に押し負けていた。「え、どういうこと。七階に住んでるから?」「きみ、まだ酔ってるなあ」「冗談めかした声色を無表情で出し、彼女は「そうじゃなくて私、古川と揉めてたんだよね、小説のことで」と続けた。

「は? なに、小説?」

「彼が合評会に出してた小説、全部私を書いたやつなんだよね」

思いがけない方向からの一撃は私のこめかみを正確に撃ち抜き、思考を停止させた。絶句しているあいだに彼女は更に言い募る。「つまり私は彼のゴーストライターだったわけ。まあ、私が頼んでそうしてもらったんだけどね。一回のときに約束したのをずっと続けてたんだけど、彼、最近なんか病んでいた。自分が書いたって錯覚してたというか」「……なんで?」「本当だよ、ライン見る?」「そういう問題じゃない」「お金も払ってたし。少なかったかもだけど」「そういう問題じゃないって」脳が冷える。本当にそういう問題じゃなかった。なさすぎた。芽依留がこんな意味不明な嘘をつくとは思えないけど、真実だとしても意味不明だ。彼女の表情は硬いまま、反省しているようでさえある。なのに真意を汲み取れないから、いらいらする。

他方、彼女の種明かしに納得する部分も、なくはなかった。あの妙に感傷的な作品群の書き手が古川でなかったとすれば、意外性が失われる代わりに、腑に落ちる。それにしたって、壊れかけの電灯みたいに脳裏で明滅する問題の数が多すぎた。私が古川だと思っていた人間性の大部分が芽依留だったこととか、古川は所詮私と同じで小説が書けないタイプの人間だったこととか、それじゃあ私は誰と、何とセックスしたのだろうかとか。

二人して黙り込んだけど、その意味はまったく違っているだろう。芽依留は現状を真剣に受け止めている。私は至近距離まで迫った古川の顔を思い出して情緒を持て余している。アイツは、私への名残惜しさだけを抱えて死んだわけじゃないようだ。視線を落として手元を見た。拳を叩きつけたあとが、まだ少しへこんでいる。

「なんで古川だったの」自分の中にある鬱屈をどう表現しようか逡巡した挙句、痴話喧嘩み

たいなセリフを吐いてしまった。「私でもよかったんじゃないの」

「新人歓迎会、いや、あのときはオンライン懇親会って名前だったっけ」芽依留はあくまでも事務的な口調で話し始める。「私は小説の話がしたかったんだけど、全然そんな雰囲気じゃなかったよね。誰が三股かけてるとか歴代の部長で無能だったのは誰とか、ガチでどうでもいい話ばかり。よく考えたらさ、高校時代も、小説だけを友達にしている人種、周りで私だけだったんだ。大学に上がったぐらいで変わるわけがない。でも、失望はしちゃったよね。こりゃダメかもなって思ってたけど、一応最初の合評会に参加してみた」ミステリアスに見えるまばたき。自然な二重瞼。化粧を落とさずに寝て、起きたばかりなのに引き締まった顔つき。「悪い意味で予想通りだったよね。合評の段階でちよつとキモかったんだけど問題はその後。先輩の男どもからラインがめっちゃ来てさ。将来有望だから他の作品も見せてとか、書き方教えてあげようとか……一応芝とかに確認したんだけど、誰もそんなラインもらってないって。優しさじゃなくて下半身だったわけ。まあわかるけどね、今はまだ昭和だから」思い上がりでしょ、と言わせてくれない説得力が美貌から放たれている。「それで古川に頼んだ。彼が書いたことにすれば作品だけ見てくれる確率が上がりそうだったから。そしたら案の定評価が真逆になってウケたよね。何かの参考になるかと思って出し続けたけど無駄すぎた。新人賞にも一度も引つかからなかったし……まあそっちは私の実力不足か」

「ずるくない？」なんとか反論してみるけど、そもそも反論しようとする自分の真意がわからない。「だって芽依留の発想って、古川のこと見下してるから出てきたわけじゃん」
「そんなつもりはなかったんだけど、結果的にそうなるって気付くのには私は二年、古川は三年かかったな。四回に上がってからは頻繁にラインで喧嘩してた気がする。最近は死にたいとか言い出して。でも私は本気だと思ってなくて」

うっかり彼を褒めてしまった合評会とそこからの展開を思い出して、乾いた神経が一層逆立つ。芽依留と古川の共犯関係の中で私の出番は一瞬だったみたいで、だけど一瞬だったからこそ致命傷だったような気もする。いやだ。本当に勘弁してほしい。私は巻き込まれただけだ。こっちから巻き込んでしまったなんて、ほんの少しでも考えさせないで。

「気にしないでいいよ」パニック寸前の私に向かって芽依留はおもむろに表情を緩め、憐れむような眼差しを寄せた。得意の洞察力を発揮しなくても、私の内心なんて丸わかりなのだろう。「古川はきみじゃなくて、ずっと私に怒ってただけだから。きみにブロックされたのは関係ない」

屈辱が破裂し、鋭い舌打ちが飛び出した。それは芽依留でなく、地上の死体に向けられた舌打ちだ。鬱積した極端な感情で、頬からこめかみにかけての筋肉が痙攣する。木之本に殴られたのを思い出す。

そうか。芽依留は全部知ってたのか。そりゃそうか。古川みたいなヤツの口が堅いわけ、ないか。クソが。なんでこれ以上みじめな気分にならなきゃいけないんだ。

「先を続けて」途切れた瞬間に殴りかかってしまっただったからそう言ったのだけれど、芽依留はにべもなく首を振った。「続きはないよ。ラインじゃ話にならなかったから今日、仲直りの機会になればいいかなと思って呼んだだけ」「そんな大事なことがあったのにどうしてほったらかして寝ちゃったの」「言ったでしょ。夜勤が続いて疲れてたから」「こういうことになるって、少しでも考えなかったの。まともじゃないよ」「知ってるよ」声高で透き通った叫び。美人は声を荒げてても美人だ。「まともに生きられないのなんて知ってる。医者にも言われたしSNSにも書いてある。だから血反吐吐いて稼いだ金をホスクラに運んでんだよ。あそこなら私は、間違っただけでも許されるから。古川の気持ちだって、正直わからない。私ならそもそも他人の作品を我が物顔で出せないし、ゴーストライターに振り回されて死ぬとか考えられない。彼だけじゃない。木之本も、祈璃も、きみだって……他人の考えなんて全然わからないし、わかってすら思えない。私は勝手にするからみんなも勝手にしてほしい」奔流のように捲し立てて、小さく噎せた。肺の酸素がなくなったらしい。彼女は深く息を吸い込んでから、まるで自分自身を処刑するように言い捨てた。「こんな性格の人間、根本的に小説書くのなんか、向いてないんだよね」

芽依留の主張に理解できるところとできないところがまだらに入り混じっているせいで、私は何も言えなくなってしまった。彼女は石に齧りついてでも自己を貫こうとして、自他問わずに傷つけまくっている。そんな生き方しか選べないからなんだろうけど、もし私が同じ運命だったら、とっくの昔に諦めて部屋に閉じこもっていただろう。

私が卒業まで目立った挫折を経験せず、呑気に過ごしていられたのは周囲の雰囲気と、それに流されてかまわないと思える人間性のおかげだ。自分の理想像、なんてどこにもないし、できることなら友達とか世間とかが求める理想のテンプレそのものになりたいとさえ思っている。芽依留とは決定的に異なるし、間違ってるのは彼女だ。私の方が上手く生きてる自信がある。

なのに彼女が、羨ましくないのに眩しくて、腹立たしい。

「死にたくないあい」祈璃が鳴いた。声に寝息が混じっている。今回は時報ではなく、私の殺

意をばらばらに解体する役割を果たしてくれた。

祈璃。社会に出たらちゃんと適応して、ホームページにある『当社で働く先輩からのメッセージ』みたいな欄で輝く笑顔を見せてそうな、祈璃。いや、私だってそうなのかもしれない。それなりの自己顕示欲と劣等感を抱いている私だって、所詮はそれなりだからまともにやっていけるのかもしれない。

だからこそ改めて古川への怒りが湧き上がった。彼は自分で書いたわけでもない、ゴーストが書いた作品で私を釣り上げられたことに達成感を覚えたのだ。挙げ句の果てには釣果をホテルに連れ込むことさえできた。それは未来の見えない彼にとって唯一無二の成功体験だったのだろう。愚かな勘違いをした私は、彼にとって輝かしい報酬だったわけだ。

「古川は、なんで死んだんだろ」私は少し和睦するような心持ちで芽依留と自分の中間地点に疑問を落とす。「だってさ、別に死ぬほどじゃなかったじゃん」

しかしその問いは芽依留の意見を聞くより前に氷解してしまった。私には古川が死を選んだ理由がわかってしまう。借り物の成功体験も、一端の凡人には十分な成功体験を与えてくれるから。自分の成果だと勘違いするのは簡単だし、一旦手に入れたら決して放したくないから。私はその気持ちを、学業と就活の両方を通じていやというほど痛感した。仮に今、卒業か内定のどちらかが取り消されたら、私だったのうのと死ぬだろう。面接でのセリフやESの文章、卒論に至るまで一切合切が借り物だったにもかかわらず。たとえゴーストライターの作品でも、それが唯一のよすがだったとすれば、あるいは。

目の前の終わりをかぶりつくように呑み込んでから首を振った。この期に及んで古川を思い遣っている思考回路を引き裂きたい。私は、私の不幸だけを考えたい。でもそうしたら、めちやくちゃバカな自分と向き合わなきゃいけない。私だって古川から何かを得ようとしていた。今となつてはそれが何か全然わからないけど、とにかく相手を使おうと企んだのは私も同じだ。なのに私は何も得られないまま生きて、アイツは得たものを大事に抱えて死んでいった。最悪だ。

この鬱憤をどう処理すればいいのだろう。眠気と酩酊と混乱で溢れかえっている脳味噌では判断できない。けれど乱れ飛ぶ思考を止めて正気に返ったら、脳内で概念として浮かんでいる『死体』が血を通わせた形で現れて、私はきつと座っていられずに叫びだしてしまう。みんながこの状況を正確に認識してしまったとき、私たちはどうなってしまうのだろう。

そして、私はもう一つの大きな疑問を、意味が通る文章にしようと懸命だった。芽依留は宅飲みメンバーのことを、本当はどう思っていたんだろう。とつくの昔に文芸部へ見切り

を付けた彼女は私たちを、なんなら古川の作品を古川が出したからといって嘲笑ったり無視したりしてた私たちをどんな思いで家に呼び、嘔吐まで許していたんだろう。私なら友達だから、みたいなふわふわした理由で大丈夫だけど、他でもない芽依留がそれで済ませられるだろうか。

口を開いた瞬間に右側からどんと震動を伴った鈍い音が響いた。私と芽依留が同じタイミングで無気力に顔を向けると、木之本が引きずってきた芝を床に投げだしたところだった。芽依留が腰を上げ、「どうもー」と呟きながら後頭部を抱えている芝の隣を横切って廊下の向こうに消える。一仕事終えた木之本は私の頭を掴んで支えにしつつ、芽依留のいた場所に座った。

底が澱んだ終わりのグラスを持ってふらふらと立ち上がる。見下ろすと木之本は相変わらず据わった目で笑っていた。いつ見ても彫りが深い。今どきの流行りではないけど、個人的に文芸部で一番好きなタイプの顔だ。

私は、他では発散できない欲求をぶつけるために思い切り腕を振り上げて、グラスの底を木之本のひたいに叩きつけた。

張り裂けるような音と共に手の中のグラスが砕けた瞬間、遙か下の方からけたたましい悲鳴が、木霊を連れて聞こえてきた。